

第6章

南アフリカの大都市における中国系移民に関する予備的考察

吉田 栄一

要約：

南アフリカの都市景観は、民主化の前後からの20年間で大きな変化を遂げた。国際的な資金や投資開発の促進が都市部を中心に進んでいるからであるが、都市開発の下で、移民貧困層の流入、治安の悪化、空洞化などの大都市の退廃的側面も注目されるようになっている。政府のグローバル都市戦略の一方で、アフリカ化が進んでいると言われる南アの大都市を、まずアフリカにとっての都市とは何か整理しながら、大都市内部の中国人移民の空間が南アフリカ社会の変容と都市のダイナミズムをどう受け入れ、移民空間の形成に反映してきたのか史的に整理する。

キーワード：

南アフリカ、都市、中国人、ヨハネスブルグ、移民

はじめに

南アフリカの民主化からポスト移行期にかけての大都市は大きな変容を遂げた。その背景には、アパルトヘイトの終焉により、対南ア経済制裁が解除され海外資金の都市への流入が顕著になったことと、国境が広く開かれたことで人の往来が自由になり訪問者や移民が増加したことがある。とりわけ、訪問者が帰国せずに都市部でインフォーマルビジネスに関わる傾向が強くなり、同時に移民、難民の流入や不動産占拠、薬物売買など違法行為にかかわる外国人の増加によって1990年代半ば以降、都市の治安の悪化が顕著になっている。

そこで、小論では、2年研究の1年目中間報告として、研究のキーワードとなるいくつかの論点についての整理を試みた。具体的には、アフリカの、そして南アの大都市の在り方をめぐる最近の議論を整理し、都市変容の要因としての移民論を検討、さらに移民の中でも中国系移民が南アの都市においてどのような空間を形成してきたのか整理を試みている。

第1節 アフリカの都市的なるもの

これまでの都市概念や都市的なるものの概念（ルフェーヴル [1976; 2000]）¹、あるいは都市化の概念と、今日のアフリカ都市の経験はあまりにもかけ離れている。それゆえか日本においてはアフリカ都市を総体的に捉えようとする研究がこれまで限定的であったように思われる。実態として今日のアフリカ「都市」が経験している「都市化」は、アジア、南米などの都市より早い速度で進んでいながら（吉田 [2008]）、アフリカ都市のどの側面をとっても、かつての途上国都市が経験したことの無い規模での機能不全に陥っている。この機能不全とは都市行政の構築とサービスデリバリーの問題や、経済開発、企業誘致と労働市場の需給が一致しない問題、そして住宅資本による富裕層向けに偏った投資や住宅供給の絶対的不足の問題、さらには途方も無い規模の汚水・汚物処理、廃棄物処理問題などである。問題に拍車をかけているのは、都市の規模拡大に比例して、およそアフリカ大都市の治安は悪化し続けており投資を遠ざける要因を自らつくっていることである。

日本においてアフリカの都市に関する多くの研究は、その多くが都市人類学とその周辺にあることもあり、非常にミクロな視点から都市を語ることに偏ってきた。例えばタンザニアの地方都市ムワンザの商人とその商業活動や（小川 [2004]）、ガーナの大都市アクラの零細ビジネス（織田 [2002]）、地方都市クマシの中小企業（遠城 [2002]）などは都市における生存戦略アプローチに影響を受けてきた。また都市、農村間を季節的に、あるいは不定期に移動して収入の機会を多角化するアフリカ人の生態から、都市において展開する農村的生態への注目なども見られた（松田 [1999]）。さらに大衆が住みにくい都市、あるいはエリートのための都市を飼いならず、あるいは作り変えていく視点を取り上げられた（松田 [1996]、吉田 [2002]）。

都市的なるものとしてアフリカ都市を想起すると、従来の生存戦略論や、制度や権力への抵抗あるいは飼いならし、農村との紐帯といったものは、すべてその側面的特徴の説明としては妥当であるとしても、それぞれの側面が作り出す都市の全体像は見えず、これらの議論が前提としているアフリカ都市がどのような存在なのか、どのような都市的なるものかという議論が一見、欠如しているように思われる。

筆者は断続的にはあるがアフリカ都市研究に携わってきた中で（吉田 [2000a; 2000b; 2000c; 2002; 2007; 2008; 2011]）、経済成長なき都市化や雇用創造の限られた都市

¹ ルフェーヴル [1974]（原著は Henri Lefebvre [1970] *La Revolution Urbain*, Editions Gallimard, Paris.）の訳者今井によれば都市（La Ville）はパリ、ニューヨーク、東京のような歴史的に存在した現実の対象で、都市的なるもの（L'urbain）はルフェーヴルの設定した理論的仮説で、潜在的で可能的な対象。本章では、アフリカ都市と定義する前に、都市的現象あるいは都市の実践という意味合いで、アフリカの都市的なるもの（l'urbain Africain）という表現を用いている。

化のつくり出す都市的なる存在とは何かと提起してきた。そして、モダニズム都市思想あるいは20世紀型の都市計画概念がアフリカの都市的なるものやアフリカの都市化に対してまったく無能な制度と化していることを指摘してきた。このような都市計画の概念、制度と、実態としての都市の間の齟齬は今日、世界中で拡大していて、制度の硬直性が社会環境を制限する問題の巨大さに都市住民が翻弄されている実態がある。例えば、社会の高齢化、単身化、雇用形態の変化によって住宅の所有形態と住まい方、消費生活にドラスチックな変化が展開する中で、生活の変化に都市計画概念とその制度が対応できておらず、建築論から社会福祉論まで含めて議論が高まっている。そこに関わるのは土地利用法、建築基準法など建築規制、環境規制、消防法、大店法や小売商業に関する規制など都市計画とそれに相互補完しあう多様な関連法制度である。つまり都市に関係する全ての制度は、世帯や住宅所有、住まい方の変化、消費の変化に対応せねばならないことを我々は確認しているのである。

もし、アフリカ都市が近代化概念での都市と呼べないものであるならば、アフリカで空間的に無限に集積、拡大しつづける都市的なるものとは何であろうか。O'Shaughnessy [2008] は、アフリカ都市は不可視的でかつ再帰的实践であるとし、アフリカ都市が周知の都市的景観からかけ離れていて、合理的な機能の集積には見えなくとも、見えないながら機能的なものが集中しているのだと解明する。さらに アンリ＝ルフェーヴルの「生きられる空間 (Lived Space)」概念に拠りながら²、どのような空間的な構造や制度が展開していようと、各々の生活者やアクターがいかに相互に関係するかが、都市的なるものの社会・地理的景観を規定するとしている。また O'Shaughnessy はアフリカ都市において移民や難民、貧困や社会基盤不足などの要因が、都市を我々が通常想像するものとは異なる、表面的な存在にしているのだが、このような予測不可能な空間となっていることに対し、住民は移動が容易でかつ創造的な方法で都市を機能させているのだとした。

モダニズム都市論が支配してきた都市思想についてケープタウン大学アフリカ都市研究センターを主宰する Pieterse は、近代主義都市計画や都市美観主義を批判している (Pieterse [2010])。さらに Hentschell and Press はアフリカ都市とは心象的存在(imagery)でかつ生きられる経験とし、また同時に都市はモダニストが達成したものと前近代的な、かつ犯罪的な状況からなるパッチワークと捉えている (Hentschell & Press [2009])。アフリカ都市では見えない機能が機能しているとする考えは、既存の都市景観アプローチに疑問を投げかけており (De Boek and Plissart [2006])、アフリカ都市研究では景観と機能を結びつける新たなアプローチが求められているのではないだろうか。

² ルフェーヴルの『空間の生産』では、社会空間は可視的・物質的配列、思考された空間の秩序、利用者の領域を介して生きられる空間が相互に影響し合うとされる。つまり、建造環境と都市計画そして人々の都市での生き方の3次元が作用しあう。

このようなアフリカ都市に関する議論は、空間に重ねられる経験や人々の交差が作り出す景観の視点からみると、これまでのポストモダン地理学による社会的経験空間概念³にも影響されていると思われる。

第2節 南アフリカの都市

南アフリカの都市はアパルトヘイト関連法の撤廃が進む1991年から94年の民主化を経て、90年代後半にかけては民主化後の移行期を経験した。その後は1990年代半ばから新自由主義的経済政策の下で、都市開発の波を経験してきた。

1994年以前のアパルトヘイト都市においては人種隔離の地域政策と都市政策のもとに、人種管理を経済的にも正当化する空間政策が長きに亘り展開した。白人にとっての都市は空間化したモダニティであり、都市的アメニティ、消費文化、都市的な住まい方に特徴づけられていた一方で、黒人にとっての都市は密集したタウンシップと過密居住、遠距離通勤に既定される暮らし方、低賃金労働と半失業、低所得の消費生活、極度の被差別を感じる場、そして抵抗運動の場であった。

アパルトヘイト末期の1990年代初頭には約800万人のスクォッターを数え⁴、人口の5分の1が不法居住という状態になった。不法居住区⁵の空間が黒人にとっての都市であった。民主化に向かう時期において、1992年には人間らしい住まいは基本的人権であると居住権を主張する国民居住会議⁶が発足し、政治家、解放運動団体、専門家を含め、民主化要求の中に居住権の実現をもとめていく。国民居住会議は国民統一都市開発戦略を掲げ、黒人にとっての都市のあるべき姿を統一戦略として提示、都市の公共サービス供給、都市自治体のガバナンスの改善、そして分断されたアパルトヘイト都市構造の結合を求めた（吉田 [2000]）。

1994年以後のポストアパルトヘイト期においては、1994年から96年の公的介入を中心とする復興開発計画（RDP）が都市空間のあり方にも大きな影響をもたらした。具体的には公共住宅の供給、公共交通の整備といったデリバリー中心の公的介入のまちづくりと、都市開発と投資誘致を念頭においた新自由主義的な都市づくりが並立して提示された。

新自由主義的都市づくりはその後1996年から2000年にかけての成長雇用再分配戦

³ たとえばトゥアン [1993]。

⁴ アパルトヘイト体制からみた「不法居住者」。

⁵ Squatter は freestanding settlement とも称された。

⁶ National Housing Forum, 副議長は後の住宅大臣で日本政府がアパルトヘイト期にEUと共に公式に支援した社会開発団体 Kagiso Trust 代表 Eric Molobi。

略（GEAR）における都市戦略の中心におかれ、都市の経済政策からみたポスト移行期はRDPからの離脱とGEARを通したまちづくりに中心が移る。つまり都市開発や投資誘致を念頭においたネオリベラル都市政策が中心となり、さらに富裕層と新中間層をターゲットとした郊外開発、新都心開発などの都市開発戦略、そして、2020年オリンピックの誘致や世界陸上選手権（1998年）、クリケット世界選手権（2003年）、サッカーコンフェデレーションカップ（2006年）やサッカーワールドカップ（2010年）などのイベントツーリズム誘致のための都市開発が中心におかれる。移行期のRDP都市に比べてポスト移行期のGEAR都市とGEAR都市戦略は、貧困層や黒人居住区の生活の改善を軽視する都市政策の展開ではないかとの見方と、RDPを通した住宅供給が貧しい住まい方を助長するものであるといった批判を受け、新たな都市戦略をもとめる動きへとつながる⁷。そして2004年の都市白書では、生産的な都市、包摂的な都市、持続可能な都市、良い統治の都市が提案される。

しかしながら、2000年代において金、プラチナを始め南アが産する鉱物資源価格が高止まり、海外の投資資金の流入が続くことで経済成長が維持され、都市では新自由主義的な企業誘致第一の都市計画が維持された。つまり資源分野のみならず、金融部門、小売サービス業などへ投資資金が流入し、これら成長分野の本社、中枢機能が立地するヨハネスブルグ北郊新都心や、商業モール開発が進む郊外拠点などの都市開発が進んでいるのである。

さらに2000年代を通してBRICsやVISTA等の新興国経済への注目が集まる中で、政権では南アフリカの国際社会でのイメージを改善、向上すべきという考えが台頭する。アフリカを代表し、途上国世界を代表する新興国としてのイメージづくりをまず大都市が担うために、大規模な国際会議や、スポーツイベントの誘致と興行が都市計画を動かす要因となり、空港ターミナルビルへの投資や、空港と新都心を結ぶ新交通システム導入、都市の美化計画などへの公共投資が正当化されてきたのである

（Cornelissen [2009]）。

このようなGEAR都市の構築あるいは新興国南アの発展を象徴する空間を構築しようとする動きの下で、住民の生活空間においては他都市が経験したことの無い人類史上最悪のレベルでの犯罪の危険性が拡がる空間となっている。ヨハネスブルグには犯罪都市、レイプ都市、殺人都市、エイズ感染した都市、インフォーマル都市、移民都市といった別の名前が重ねられているのである（Hodes [2008]）。

以上のようなアフリカ都市に関する議論と南アフリカの都市がおかれた状況を踏まえつつ、本研究で注目しているのは都市における移民である。南アの大都市空間がモ

⁷ たとえば ‘Housing Plan to end South Africa’s housing woes,’ 13 September 2004, Architects Lounge, Architects and Architecture of Africa, <http://architectafrica.com/bin1/news-bua-housing-southafrica-001.html>

ダニズム都市とアフリカの都市的なるものの総合体として存在してきたアパルトヘイト期から、よりアフリカ化が進んだと言われる今日に至るまで、都市における移民空間は都市のダイナミズムと制度の変化を受け入れてきた。移民空間はいわば空間の経験を写しだす鏡でもあったのではないだろうか。

第3節 都市における移民

都市における移民について、サッセンはグローバル化した今日、幾つかの世界都市を頂点とする経済的支配の構造に再編が進み、その中で人々の国際的な移動のプロセスが変容しているとした（サッセン [1992]）。サッセンの言う世界都市はロンドン、ニューヨーク、東京の三都であり、三つの大都市を拠点とする金融資本が世界経済の構造をなして途上国を含むその他の世界を支配することを示している。移民はこのような世界的都市による支配の構造に飲み込まれる都市システムや、ヒエラルキーの構造の中を移動するアクターであり、また時にはその空間を構成するアクターでもある。南アの大都市においても、多国籍企業の本社、海外支社のネットワークを通して、あるいは ODA や民間開発資金の流入を通して、世界的都市との間でのシステム構造が厳然とできており、同時にアフリカ全体を後背地として資金や権力の集中が加速していると考えられる⁸。

グローバル都市による支配システムからみれば 1980 年代のヨハネスブルグは二次的な中心性を持つ準世界都市であったが、その後南アの大都市の地位はポストアパルトヘイト期に後退した（表）。アパルトヘイト期に国際社会による経済制裁に包囲されたことで、南ア経済は自立せざるを得ず、ヨハネスブルグには金融資本や鉱山系財閥が集中し、1970 年代 80 年代のグローバル経済での準中心性を確保することができた。しかし、民主化後 1990 年代、2000 年代には、金融制裁解除により海外の資金が南アに流入し始め、同時に南アからの資金流出も進んだ。鉱山財閥のアングロアメリカン社や、世界最大の醸造メーカー SAB 社、グローバル製紙業の SAPPI 社など南ア出自の世界的な大企業の本社あるいは本社機能の一部がヨハネスブルグからロンドンへ移転し、グローバル経済での南ア都市の中核機能のレベルは低下した。

⁸ サッセンの世界都市論の基礎理論となったフリードマンの世界都市仮説による（Friedmann [1986]）。

表 フリードマンによる1980年代の世界都市
卓越した世界都市
ニューヨーク、ロンドン、東京
主要な世界都市
シカゴ、ロサンゼルス、サンパウロ
パリ、ロッテルダム、フランクフルト、チューリッヒ
シンガポール
二次的な世界都市
トロント、サンフランシスコ、ヒューストン、マイアミ、
メキシコシティ、カラカス、リオデジャネイロ、ブエノスアイレス
ブラッセル、ウィーン、ミラノ、マドリッド、ヨハネスブルグ、
バンコク、ボンベイ、シドニー、ソウル、大阪、台北、香港、マニラ
John Friedmann(1986) The World City Hypothesis より

南ア都市の世界的なレベルからみた中枢性は低下したが、1990年代後半以後、投資、開発の資金流入は続き都市中間層人口は増加した。中間層の拡大によって消費市場も拡大、郊外ショッピングモールなど小売商業部門の投資開発が進み、また都市中間層向けの住宅開発や、ゲートッドコミュニティ開発が進んでいる。

投資、開発の資金流入にともなって、商用、観光目的の国際的な人の往来が急増し、特にアフリカ諸国との間の人の往来も急増している。民主化以前、アフリカ諸国はアパルトヘイト包囲網を形成し、外交的に敵対していた。その後外交関係が改善したことで1990年代半ばから人の往来が自由化され、アフリカ人の南ア流入が急増した。周辺国においては1990年代から2000年代前半にかけてはジンバブエの内政が不安定化し、またコンゴ（DRC）の内戦と周辺国による侵攻など情勢が不安定化し、このような国々からの難民流入も増加した。ボツワナ、レソト、スワジランド、モザンビーク、マラウイからは歴史的に鉱山労働者を受け入れてきたが、民主化後は入国の条件が緩和され経済移民も増加し都市における人種間関係をめぐる状況が急速に変化している。

具体的には、民主化直前の1993年には南ア黒人とアフリカ人の間で対立事件が断続的に発生し、またヨハネスブルグでは中国人移民の露天商と黒人の対立が問題となり、黒人露天商インフォーマルビジネス協会（African Council of Hawkers and Informal Business: ACHIB）は中国人の武力排除を明言したことで、中国人は路上のビジネスから消えることとなった。1995年にはヨハネスブルグ都心に最も近接する黒人居住区アレクサンドラでアフリカ人移民襲撃が始まり、以後断続的に移民への襲撃が続くこととなり、2008年には、やはりアレクサンドラで始まったアフリカ人移民に対する襲撃が、全国的な移民襲撃と武力排除へと展開することになった。

第4節 中国系都市住民・都市移民のダイナミズム

1. 中国人労働者の移民

中国人移民は19世紀中葉の太平天国の乱と20世紀初頭の辛亥革命の時期に増加し、南アフリカにおいては1870年代に広東出身者そして梅縣出身のいわゆる客家がモーリシャス経由で南ア、インド洋側の港に上陸、各港に組織的な移民の足がかりが作られた。南アフリカ側では1867年に北ケープでダイヤモンドが発見され、ヨハネスブルグ周辺での金鉱開発も始まり、各地で鉱山開発が展開するタイミングでもあった。以下に中国人の移民空間の史的変容を辿っていくことにする。

19世紀末のキンバリーには、オランダ領東インド（現在のインドネシア）出身の坑夫、労働者の集住する通称マレーキャンプ（Malay Camp）があり中国人労働者もこのアジア系労働者の空間に集まった。また、中国人移民流入の拠点となったポートエリザベスにもマレーキャンプ⁹が形成された。アジア航路で中国とつながったインド洋側のダーバン、イーストロンドン、ポートエリザベスは鉱山地帯の北ケープやトランスバルへ中国人労働者が移動する拠点となり、また鉱山などの雇用を離れた中国人が労働力プールとして滞在する地区ともなった。ポートエリザベスには中国人労働者の移民をサポートするビジネスや、移民によってはじめられた様々なビジネスが生まれ、ことクリーニング業者は中国人移民によるビジネスが独占状態にあった（Yap and Man [1996]）。

中国人の鉱山労働者や商人の内陸部への流入が増加すると、トランスバルでは1894年、中国人を含む有色人種の非白人居住区への移転が鉱業長官により命じられる。当時、中国人、黒人、カラード、マレー系の移転の制度化が試みられたが、既に中国人の南ア移民が始まって約30年が経過し、ヨハネスブルグ市内のブラームフォンテン（Braamfontein）、フレデドープ（Vrededorp）、フォールズバーグ（Fordsburg）、フェレイラスドープ（Ferreirasdorp）そしてジェッペスタウン（Jeppestown）には中国人商店が集中していた。ヨハネスブルグでは20世紀初頭に中国人の所有する商店が177あり、中国人経営者も商工会に名を連ねていたことで、ヨハネスブルグ商工会議所は強制移住に反対した。

1904年から1910年にかけては、トランスバルや北ケープの鉱山開発が進み中国人坑夫の雇用が加速、英領香港を経由して南アに流入する中国人が増加し、この7年間で6万4000人の鉱山労働者が入国した。しかし現地での反中国人感情の高まりや、中国人が労働条件について組織的に反対するなど黒人坑夫に比べて労務管理が難しい

⁹ マライカム（Malaikam）とも称した。

と判断されたことなどから 1907 年より中国へ送還が始まり 1910 年にその送還は終了した (Yap and Man [1996])。

2. 台湾、香港出身の移民

その後、アパルトヘイト体制下では 1970 年代末まで中国人の移民が進まなかった。中国人は国民党政権にとって居住地区分法ではカラードとして、背徳法ではアジア系として等とアパルトヘイト関連法で人種分類が統一されなかったことがあり、またいずれにせよまた非白人として中国人は被差別人種となったからである (Park [2008])。その後、1970 年代、国民党政権下においては、アパルトヘイト体制を承認した台湾との親密な外交関係が展開し、外交政策としての台湾人移民受け入れが促進された (吉田[1998])。特に 1984 年以降、外交関係への配慮から台湾出身中国人は居住地区分法に関して名誉白人の扱いを受け、白人居住区への居住が認められた。これによって移民が増加し、1995 年には台湾人移民の流入はピークを迎え、コミュニティの人口は約 3 万となった。同じ時期に中国返還を控えた英領香港住民の南ア移民も増加し、これも 1997 年、香港返還の年にピークを迎えた (Park [2008])。

台湾、香港出身の移民は高学歴で富裕層も多く、投資家、特にアパレル産業など軽工業投資者が多い。台湾、香港出身の投資家は、旧ホームランドに設置された工業団地や大都市近郊黒人居住区に隣接して線引きされた工業用途地区に投資したのである (吉田[1994])。特にニューカースル市は台湾企業への投資優遇措置を制度化したことから、台湾企業による投資とそれにとまなう移民が集中した。ニューカースルは旧クワズルホームランドに近接した人口約 40 万の工業都市であるが、1990 年代半ばには主として台湾出身の中国人によるビジネス約 2000 事業所が進出し、中国人経営の製造業工場が 70 工場立地した。さらに 1995 年には市議会に中国系で初の議長が就任した¹⁰。1980 年代から 90 年代初頭にはこのような台湾出身中国人移民の流入急増をうけ、1992 年にはブロンコスプルイト (Bronkorspruit) で、また 1994 年にはポッチェフストローム (Potchefstroom) にて 5 万 5000 戸の住宅開発と 500 の工場投資を誘致するドラゴンシティ・プロジェクトが提案され、ブロンコスプルイトのニュータウン開発は台湾の仏教寺院を核に進展する (吉田 [1998])。

このような台湾、香港出身者の流入はその後、1997 年 7 月香港の中国返還によって大きく転換する。香港が中国の一部となったことで、北京との国交なくして、南ア政府は香港との関係を維持できなくなったのである。ヨハネスブルグ・香港間の航空路

¹⁰ 1992 年には台湾出身の黄士豪はニューカースル市議会議員となりそして議会議長を経て副市長となる。その後インカタ自由党より ANC に転籍して 2004 年には国会議員となった。

や在香港南ア領事館の維持が不可能となり、長期的な対中経済関係の拡大を見越した結果、台湾との外交は1997年12月に絶たれ、1998年1月に北京との外交関係が開設された（吉田 [1998]）。この結果、台湾からの南ア移民の道は閉ざされ、3万人の台湾系人口は6000人に減少した。

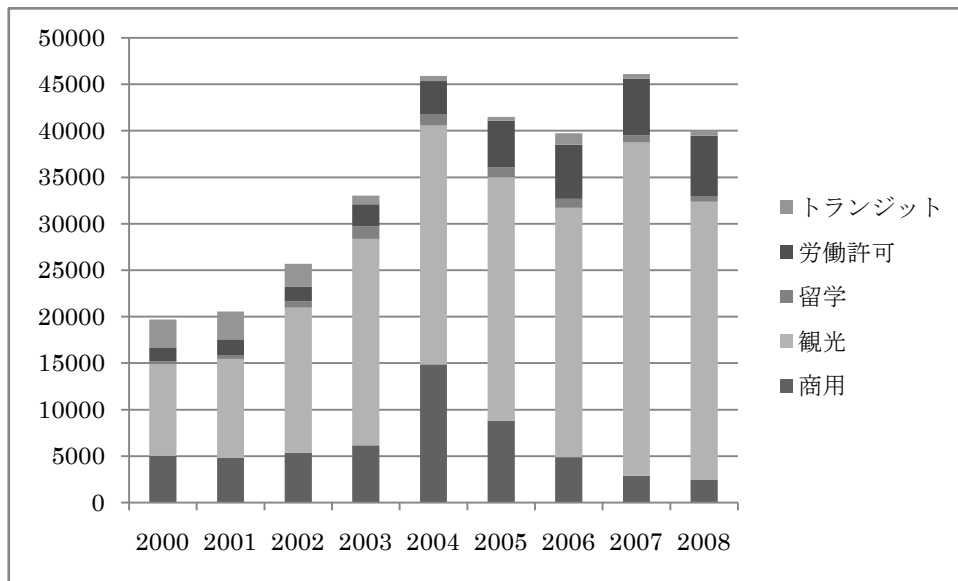
3. 中華人民共和国出身の移民

一方、中国本土からの移民は、1989年の天安門事件の前後から増加し始め、特に江蘇省、浙江省出身者が、レソト、ハンガリー、コートジボワール等を経由して流入するようになった。国交開設を前に1992年には経済交流が開始され、大陸出身者への査証の発給が可能になるとともに不法移民の組織的な流入が顕著となる。国交開設前に象牙密輸、アワビ密漁密輸、そしてヨハネスブルグ市内などでのインフォーマルビジネス就労が急増した背景には、犯罪組織の移民と不法就労への関与があったとされている。この様な状況に3世、4世の中国系南ア人は、新移民がネガティブなイメージを作り出しており、中国系の地位を貶めるものであると非難し、中国系人との対立が明確になった¹¹。

1998年に北京と国交を樹立した後は、中国人商人、観光客の南ア訪問数が顕著に増加し、それに比例して中国系人口も急増する。図1のように、来訪者数の変化をみると、国交樹立後の数年間は商用目的の来訪者が多いが、近年は観光目的の来訪者と労働許可を持っている来訪者が増加している。国交樹立後の数年間は、政府系企業、公営企業、地方各省政府関係の商用目的来訪者が多かったが、近年は、中小零細企業や個人商人が観光ビザで来訪している部分が増加しているのではないかと推測される。また、中国系企業、大企業の投資や建設事業の受注が拡大し、正式な労働許可を持って入国する中国人も増加していると思われる。

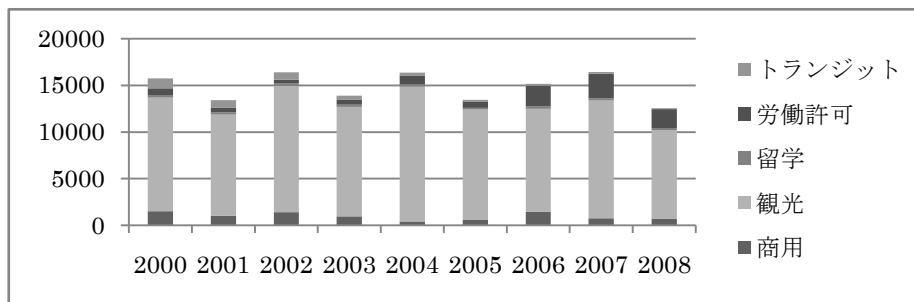
¹¹ クリス=ワン氏（Chris Wang, 元南ア国会議員）との面談（2010年9月7日）による。

図1 中国人の南ア来訪者（渡航目的別、単位：人）



(出所) Statistics South Africa [各年版]

図2 台湾人の南ア来訪者（渡航目的別、単位：人）



(出所) Statistics South Africa [各年版]

以上のように中国系移民は、異なった出自と南アでの在住経験を持っていて、それぞれのグループが都市において異なった根付き方をみせている。Park [2008]はこのような重層的な中国系移民層を台湾系富裕層（約6000人）、大陸出身の上海など都市エリート層と貧困層（30万から35万人）、中国系南ア人2世、3世、4世（約1万人）からなるとしている。中国系移民は世代によって特徴が異なるほか、言語的には英語を第1言語とする2世、3世、4世、北京普通語が第1言語の新移民など多様で、また南ア滞在の法的位置づけも永住権保有者から、長期滞在者、一時滞在者と異なる。教育レベルや、居住地、階級、職、IDの有無によっても異なる重層的な社会でありお互いに緊張関係にある。しかしながら、外国人排斥の暴力や行動に対しては、中国系としてのプライドの高まりを共有し、グループ間の結束に至っているとされる（Park [2008]）。

現在、南アフリカにおいてはヨハネスブルグ市内 2 箇所に中華街がある。現地での通称「オールドチャイナタウン」はヨハネスブルグ都心から約 1km 西の都心近接地区にあり、19 世紀終盤より中国系コミュニティの中心となってきた。1990 年代前半まで 5 ブロック、通りの南北あわせて計 10 ブロック程度の中華街ではあるが、アフリカで唯一の中華街であった。「ニューチャイナタウン」は 1990 年代後半から、ヨハネスブルグの中心部から約 5km 北東郊外の住宅地区シリルディーンの近隣商店街に形成された（張ほか [2006]）。先頭をきってオールドチャイナタウンから移転した飲食店の出店を機に、治安の悪化した都心のチャイナタウンより移転が始まり 2000 年以降、中国人移民の流入増加で店舗開設する小規模な投資者が集中し、今日のニューチャイナタウンが形成されている。この他にも、プレトリアの東 50km のブロンコスプルイトには台湾の仏教寺院佛光山の分院南華寺を中心とするニュータウン開発が進んでおり、ニューカースルには規模を縮小した台湾系のコミュニティが、またケープタウンの優良な中学高校の通学区には香港、台湾系富裕層のコミュニティが形成された。

おわりに

都市における移民空間に関する研究や、移民が構築するコミュニティ、地域におけるローカルな関係性にかかわる研究は、近年、越境者によるマイクロリージョン形成への視点で整理されつつあり、たとえば国民国家や近代への問題提起の点で注目されている（王 [2010]）。また、ディアスポラと越境者、越境者の移動過程での空間形成さらには移動性と非定着性の点などからも注目されている。中国系の移民空間の研究では、園田はサンフランシスコと旧ビクトリア（現バンクーバー）を例に、中華会館の設置と官商関係を取り上げている（園田 [2010]）。山下は 30 年にわたり世界中のチャイナタウン研究、特に中華街の空間形成に注目している（山下 [2006; 2009]）。

先述のように、アフリカの都市的なるものの 1 つの側面が移民の存在であるならば、その不可視的な、しかし生きられた経験がいかに関係する都市空間に反映されるのか問う意義は明らかではないだろうか。越境者によるマイクロリージョンには地域内の相互行為、社会関係の集積があり、その広がりには特定の場と領域を持つとされている。また移民のマイクロリージョンの囲まれた区間の表現体は、各種の宗教施設や文化施設が展開して、そこには公権力空間との不一致や交渉そして承認を経て、政治性を孕み持つ空間的媒体となるとされている（園田 [2010]）。

ヨハネスブルグ都心のオールドチャイナタウンはその景観に 100 年にわたる中国系移民の歴史を刻んできた。しかしその都心部は世界最悪の犯罪発生地帯となり、放置不動産はアフリカ系不法移民や犯罪集団が占拠するようになった。オールドチャイナ

タウン周辺でも放置不動産や取り崩された更地が増加し、櫛の歯が抜けた状態になっている。一方、シリルディーンのニューチャイナタウンには都心部からの移転投資者と、それを遙かに凌ぐ大陸出身者のビジネス投資や居住が進んだ。この2つの移民空間のダイナミズムにおいて、異なる階層の中国系人が積み重ねている経験、民族の誇り、そしてチャイナタウンに作り出そうとしているイメージが、新興国南アの都市戦略でどのような位置を占め、役割を担っていくのだろうか。

参考文献

〔日本語文献〕

- 王柳蘭 [2010] 「越境者とマイクロ・リージョンの創出」『地域研究』10-1 pp.7-15。
- 小川さやか [2004] 「都市零細商人の経済活動における連帯と生活信条ータンザニア地方拠点都市ムワンザにおける古着の信用取引を事例に」『アフリカ研究』64 pp.65-85。
- 織田雪世 [2002] 「美容師になることを選んだ女性たちーガーナ都市部で新展開する女性の職業」『アフリカレポート』39 pp.48-53。
- 遠城明雄 [2002] 「西アフリカにおける中小都市研究について」『金沢大学文学部地理学報告』10 pp.37-47。
- サッセン、サスキア（森田桐郎ほか訳）[1992] 『労働と資本の国際移動ー世界都市と移民労働者』岩波書店。
- 園田節子 [2010] 「マイクロリージョンとしての移民社会と『本国』ー『場』の生成による地域」『地域研究』10-1 pp.16-32。
- トゥアン、イーファー（山本浩訳）[1993] 『空間の経験ー身体から都市へ』筑摩書房。
- 松田素二 [1996] 『都市を飼い慣らすーアフリカの都市人類学』河出書房新社。
- [1999] 『抵抗する都市』岩波書店。
- 森明子 [2005] 「大都市と移民ーベルリンにおける『外国人』カテゴリーと『多文化』意識」『国立民族学博物館研究報告』30-2 pp.145-229。
- 山下清海 [2006] 「ラオスの華人社会とチャイナタウンービエンチャンを中心に」『人文地理学研究』30 pp.127-146。
- [2009] 「インドの華人社会とチャイナタウンーコルカタを中心に」『地理空間』2-1 pp.32-50。
- 山下清海・秋田大学地理学研究室学生 [1997] 「横浜中華街と大久保エスニックタウンー日本における新旧2つのエスニックタウン」『秋大地理』44 pp.57-68。

- 吉田栄一 [1994]「南アフリカ・アフリカ人ホームランドの地域経済構造と開発」『外務省調査月報』1993-4。
- [1998]「南アフリカ共和国の台湾断交と華人社会」『アジア研ワールドトレンド』39 pp.34-35。
- [2000a]「南アフリカの路商と移民の参入—ジョハネスバーグの事例」『アフリカレポート』31 pp.24-28。
- [2000b]「都市問題—南アフリカ」(国際協力事業団編『南部アフリカ援助研究会報告書 南ア本編』pp.56-71)。
- [2000c]「都市問題—モザンビーク」(国際協力事業団編『南部アフリカ援助研究会報告書 モザンビーク本編』pp.56-62)。
- [2002]「アフリカ都市の集積と崩壊—エリートの都市から大衆の都市へ」『アジア研ワールドトレンド』76 pp.32-35。
- [2007]「タンザニアとマラウイにおける首都移転の成果—地域間平等という見果てぬ夢」『アジア研ワールドトレンド』142 pp.32-35。
- [2008]「都市と国家—ウガンダ・カンパラの都市化と国家の対応」(池谷・武内・佐藤編『朝倉 世界地理講座 アフリカⅡ』朝倉書店 pp.629-639)。
- [2011]「中国のアフリカ経済進出にともなう都市地域開発」『アジア研ワールドトレンド』185 pp.28-31。
- ルフェーヴル、アンリ (今井成美訳) [1974]『都市革命』晶文社。
- (斎藤日出治訳) [2000]『空間の生産』社会学の思想 5 青木書店。

[外国語文献]

- 張崇防・程志良・馮雪 [2006] 新華社記者非洲行：南非華人生存境遇全調査 2006年09月29日
(http://big5.xinhuanet.com/gate/big5/news.xinhuanet.com/overseas/2006-09/29/content_5152411.htm)
- Accone, Darryl [2008] “Chinatown Chronicles,” in Nechama Brodie ed., *The Joburg Book*, Johannesburg: Pan Macmillan South Africa.
- Bickford-Smith, Vivian [2008] “Urban History in the New South Africa: Continuity and Innovation since the End of Apartheid,” *Urban History*, 35-2.
- Centre for Development and Enterprise [2002] *Johannesburg Africa's World City: A Challenge to Action*, Johannesburg: Centre for Development and Enterprise.
- [2008] *Immigrants in Johannesburg Estimating Numbers and Assessing Impacts*, Johannesburg: Centre for Development and Enterprise.

- Cornelissen, Scarlett [2009] "Sport, Mega-events and Urban Tourism: Exploring the Patterns, Constraints and Prospects of the 2010 FIFA World Cup," in U. Pillay, R. Tomlinson & O. Bass, eds., *Development and Dreams: Urban Development Implications of the 2010 Soccer World Cup*, Cape Town: HSRC Press.
- Crush, Jonathan and Vincent Williams [2005] *International Migration and Development: Dynamics and Challenges in South and Southern Africa*, UN/POP/MIG/2005/05.
- De Boek, Filip and Marie Françoise Plissart [2006] *Kinshasa Tales of the Invisible City*, Antwerp: Ludion.
- Freund, Bill [2010] "Is There Such a Thing As a Post-apartheid City?," *Urban Forum*, 21, pp.283-298.
- Friedmann, John [1986] "The World City Hypothesis," *Development and Change*, 17, pp.69-83.
- Gastrow, Peter [2001] *Triad Societies and Chinese Organised Crime in South Africa*, Occasional Paper No.48, Pretoria: Institute for Security Studies.
- Hentschel, Christine and Karen Press [2009] *Of Merchants and Mercenaries and Their Way through the City: Thoughts on the African Urbanism Colloquium*, Cape Town, (http://africancentreforcities.net/download/assets/merchantsmercenaries_final.pdf).
- Hong Liu [1999] "Organised Chinese Transitionalism and the Institutionalisation of Business Networks: The Singapore Chinese Chamber of Commerce and Industry as a Case Analysis," *Southeast Asian Studies*, 37-3.
- Hodes, Rebecca [2008] "'Diseased Dystopias?': HIV/AIDS and the South African City in Yesterday and Tsotsi," *Postamble*, 4-2.
- Kinnes, Irvin [2000] *Structural Changes and Growth in Gang Activities*, Monograph No. 48, Pretoria: Institute for Security Studies.
- Lemanski, Charlotte [2006] "Spaces of Exclusivity or Connection? Linkages between a Gated Community and its Poorer Neighbour in a Cape Town Master Plan Development," *Urban Studies*, 43-2, pp.397-420.
- Mokoena, A.S. [1999] *White Paper on International Migration*, Presented to the Minister of Home Affairs Dr. Mangosuthu Buthelezi.
- Nuttall, Sarah and Achille Mbembe, eds. [2008] "Introduction: Afropolis," in *Johannesburg: The Elusive Metropolis*, Durham: Duke University Press.
- O'Shaughnessy, Emma [2008] "African Urban Discourse: Invisible and Reflexive Practice in African Cities," Themed Issue: Rereading the African Landscape, *Postamble*, 4-2.
- Parnell, Susan and Edgar Pieterse [2010], "The 'Right to the City': Institutional Imperatives of a Developmental State," *International Journal of Urban and Regional Research*,

34-1.

Park, Yoon Jung [2008] *A Matter of Honour: Being Chinese in South Africa*, Johannesburg: Jacana Media.

Pieterse, E. [2010] "Cityness and African Urban Development," *Urban Forum*, 21-3.

Shaw, Mark [1998] *Organised Crime in Post Apartheid South Africa*, Occasional Paper No 28, Pretoria: Institute for Security Studies.

Schoenteich, Martin and Antoinette Louw [2001] *Crime in South Africa: A Country and Cities Profile*, Occasional Paper No.49, Crime and Justice Programme, Pretoria: Institute for Security Studies.

Statistics South Africa [各年版] *Tourism*, Report no. 03-51-02, Pretoria: Statistics South Africa.

UN HABITAT [2010] *The State of African Cities 2010 Governance, Inequality and Urban Land Markets*, Nairobi: UN HABITAT.

Yap, Melanie and Dianne Leong Man [1996] *Colour, Confusion and Concessions: The History of the Chinese in South Africa*, Hong Kong: Hong Kong University Press.